

# まるで引き寄せられるように集

# まってきた楽器たち

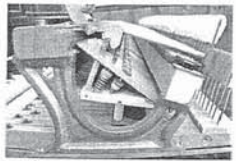
冠雪した北アルプスの山並みが美しい。夏のリゾート地として知られる長野・上高地の玄関口に、ピアノ、オルガン、小型チェンバロと、3種の鍵盤楽器がある小さなカフェ&ギャラリーを訪ねた。それは、まるで引き寄せられるようにこの地に集まってきた楽器たちだった。



「お店の名前は、最初からカフェ・プレイエルと決めていました。プレイエルが置かれた一角には、ショパンと同時代に製作された銅版面のエッチングやプレートも飾られています。」



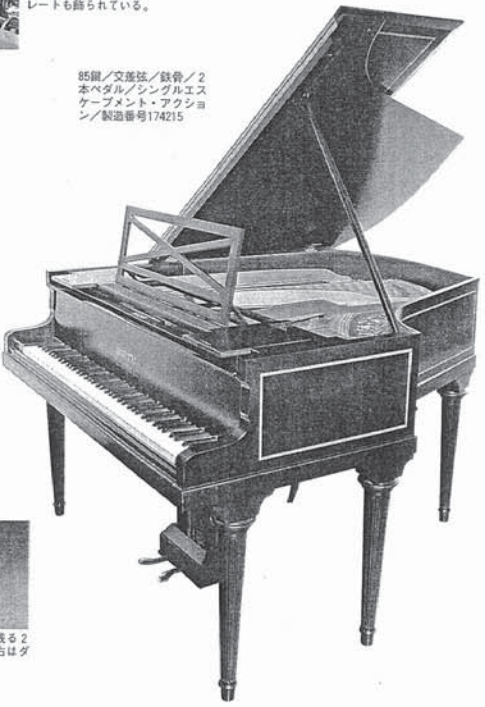
使用されている鉄骨にも、プレイエルの深いこだわりが、錆蝕(ちゅうつ)後、内部のゆがみをとるために約1年間外気にさらしたものを扱う。



プレイエルの特徴でもあるシングル・エスケープメント、トリルなど連続音の演奏には、演奏者の高度な技術が必要だ。



修復前の傷跡がそのまま残る2本ベダル。左はソフト、右はダンパー。



85鍵/文庫型/録音/2本ベダル/シングルエスケープメント・アクション/製造番号174215

## 初めて聴いた音色に、おばあちゃんは涙ぐんだ

ショパンが愛したプレイエルの名前を冠した小さな喫茶店「カフェ・プレイエル&ギャラリーやましろ」は、北アルプスの麓、上高地にある。冬の冷えた空気に首をすくませると「ここは、日本のチベットですから」と古畑博子オーナーが笑った。カフェ・プレイエルには、鍵盤楽器の「3種の神器」がそろう。

ピアノのプレイエルは、1923(大正12)年製のアンティーク。日本では関東大震災が起きた年に、フランスで生まれた。職人が手間ひまをかけて作り立てた。良き時代の逸品だ。オーナーの古畑さんがこのプレイエルと出会ったのは、約10年前。当時、静岡・磐田市にあった浜松ピアノセンターの創業者、故・吉澤孝二氏のピアノ・コレクションを見る機会があり、そこで運命的に出会った1台だった。「まるやかで甘やかで、けがれないピアノの音色」は、数あるコレクションの中から一瞬で古畑さんの心をとらえた。売却話もいくつか進んでいたにもかかわらず、「もしかしら、ピアノが私と一緒にいたかったのかもしれない。そんな巡り合わせさえ感じるほど、出会いからトントン拍子で購入話が進んだ。

プレイエルは、一般的に「シンキング・トーン」といわれ、ドイツの重厚な音色に比べて優美で繊細とされる。なかでも1920〜30年代は、プレイエルの工房がもっとも充実していた黄金期で、その時代のプレイエルはとりわけ愛されるという。フランスから日本へ、そして、静岡から北アルプスの麓へ……。2002年4月にお店がオープンしたころ、「どんな音だい?」と見に来た近所のおばあちゃんが、音色を聴いて涙ぐんだことも。「よき人々に弾かれて、聴いてもらって、ピアノが育っているような気がします」。

## ショパンとプレイエルのちょっとした話



プレイエルの創業者イグナツの息子カミーユはピアニストでもあり、ショパンとは連弾を楽しむほど親しかったらしい。「元気があって自分の思いどおりの音を出したいときは、プレイエルのピアノを弾く」と評したショパンの言葉は有名だ。「指がハンマーに直結して、ハンマーが自分の表現したい感覚や効果

果を正確に表現してくれる気がする」と。ショパンが奏でる音色は小さすぎるといわれたこともあったほど、彼は繊細な音色を好んだ。スペインのマヨルカ島の旅先にもわざわざ小型の縦型ピアノを送らせ、ジョルジュ・サンドと暮らしたノアンの館でも、ショパンの傍らにはいつもプレイエルのピアノがあった。

## 101歳だけど、いまま現役

# ヤマハオルガン

(1909年製)

## 素朴なぬくもりを持ってやってきた

2008年4月、知人を通じて「カフェ・プレイエル」にやってきたのが、ヤマハ製の足踏みリードオルガンだ。お店に来たのはいちばん最後だが、生まれたのはいちばん古い1909(明治42)年製。元々は兵庫県内にあったものが、京都にもられ、上高地へ。101歳になるとは思えないほど傷みも少なく、保存状態がよい。明治41年に、ヤマハのリードオルガンはシートル太平洋博覧会で大賞を受賞。海外でもその技術が高く評価された翌年のものである。



ストップ名前はHAMAMATSU、左側はYAMAHA ORGANのロゴ。透かし彫りが美しい。サイドのデザインもシン



10ストップ/61鍵/製造番号89955

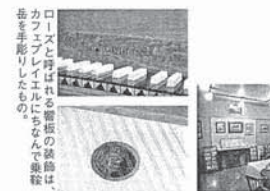
## 安曇野生まれの美しい撥弦楽器

# スピネット

(2001年製)



このスピネットは、映画「アンナ・マクダレーナ・バハの日記」に登場するものとほぼ同型。



ロリスとバハの肖像画の装飾は、色を再現したものだ。



一段鍵盤/黒鏡：シャムガキ、白鍵：再利用の象牙/チェンバロ工房穂高クラヴィア (吉岡弘司氏製作)

## 地元材も使用した手作り楽器

カフェ・プレイエルに併設されたギャラリーやましろに置かれているのは、スピネットと呼ばれる小型チェンバロだ。隣の安曇野市の穂高町に工房を構えるチェンバロ製作者吉岡弘司氏の手作りによる、安曇野生まれの美しい一品。ピアノを通じて交流を深めていた古畑さんのカフェ・オープンのお話を聞き、製作中だったスピネットを提供してくれた。

響板は、安曇野産のシラビソ(針葉樹)材を使用。木材を自然乾燥するところから弦や漆にいたるまで、ほぼ完全手作業で作っている。1台が完成するまでに1年以上かかったとか。

「初めて手がけたスピネット。プレクトラムを少し長めにするなど、いろいろな工夫を施しています」と、吉岡さんが本物のスピネットの音色を追求して完成させた。バハが生きたバロック時代の音色はかくあるかと思うような美しい音色を響かせる。カフェ・プレイエルのもうひとつの顔だ。

## オーナー・インタビュー

### 楽器と一体になる喜びを感じています

「プレイエルを静かに奏でるひとときに癒され、不思議と疲れが吹き飛んでいきます」という古畑さん。中学や私塾の教師の経験もあり、「音楽と教育は一生のテーマです」と語る。「ピアノもオルガンも、どんな方がどんな思いで作ったのか、どんな方が弾いて大切にしてこられたのか、ピアノのまわりでさまざまなドラマがあったと思います。そしていま手元にあるこれらの楽器が、時間とともに自分と一体になっていくのを感じています」。



上高地へようこそ! 松本電鉄上高地線「新島々駅」の西隣。

看板メニュー 1日8個限定の手作り「ケーキ」170円(プレイエル)

サロンコンサートも新進ピアニスト藤本敦子(ショパン)を奏でた。

お知らせ: 月刊ピアノプレジデントムック「アイラブピアノ」好評発売中  
ムック「アイラブピアノ」を生み続けるピアノたち「ヤマハミュージックメディア」が、読者の中で、本誌を通じて紹介された国内外のさまざまなピアノ1冊にまとめた内容で、歴史的一品やピアノの歴史など資料も充実。